# 連載72 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

## 独居患者さん宅の“鍵”は“命綱”「もう、こらえてや～」

8年前のある日、独居患者Tさん（大正13年生まれ・女性・認知症で歩行困難のため車いすを使用）宅を訪問しました。

「先生、いつもの場所に鍵がありません。玄関も閉まっています」と、同行していた看護スタッフが困惑顔で叫びました。屋内で転倒していたり、意識障害があったりすると大変ですので、大声で名前を呼びながらドアを叩き、窓から覗き込んでみました。しかし、人がいる気配がありません。私はどうすることもできず「もう、こらえてや～」と、その場に立ちすくんでしまいました。

しばらくしてなんとか連絡がとれました。その日は当院の定期訪問日なのですが、他事業所（デイサービスセンター）のスタッフが勘違いをし、Tさんと外出してしまったようです。近くのスーパーへお出かけドライブをしたのはいいのですが、車酔いで少し嘔吐（おうと）したため、スーパーのベンチで横になっているとのことでした。求められるまま、そこへ往診することになりましたが、私の心の中は、まさに「こらえてや～」でした。そして私たちはスーパーへと向かったのでした。

Tさんは私の顔を見るなり、まるで何事もなかったかのように「先生、来てくれたん？ ありがとう～」と言ってくれました。その瞬間、それまで無意識に感じていた「手間のかかる在宅医療に対する不満感情の澱（よど）み」と「患者さんの病状の心配」が混じった何とも言えない複雑な思いが、きれいに吹き飛んだのでした。

その後、Tさんとデイサービスセンタースタッフの希望もあって、私たちでご自宅までお連れしました。そして、適切な医療行為（点滴静注補液など）をし、症状も速やかに改善することができたのです。私たちもやっと、ほっとすることができました。

この出来事は、私の中で一生忘れられない「こらえてや～事件」として、記憶されることとなりました。

現在、在宅医療研修は、文部科学省により医学生・研修医の必須科目とされています。さらに、在宅医療は、精神論から精神ケアと高度な医療を速やかに提供できるレベルが求められています。それは、まさに議論より行動、すなわち現在主義の時代と言えるでしょう。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/